

栄
灯
拓
魂

青森県立八戸工業高等学校定時制
創立五十周年記念誌
1969-2018

校歌

作詞 折口信夫
作曲 山田耕作

一 晴れと陸奥青々と

山脈大野わたらみも

輝けん空に一色

暁の光はおよぶ

大野の街北麓

まなざり立つ学校や

若々しき若しき若しき

みづく

わが肩に照る

二 曇れ目なくとも

始し天雲帯れむ間ぞ

其空を片かけりし

馬淵川せき渡り行

地方の心も最頂崎

青森県のまに都市に

生れ来し恵みの海

このほろ

身としてこゝに

三 づかに暮る夜の燈に

けふの一日を省みじ

息らず常回や

はげみつ技能を練り

春のけはれくま市望

こゝに廻り来し日ま

勞わむと学生として

まが

春へ

坂下寒泉寺

校訓
一 自主
一 協調
一 勤勞
一 創造

寒泉寺



中里信男

学灯拓魂

青森県立八戸工業高等学校 定時制の課程

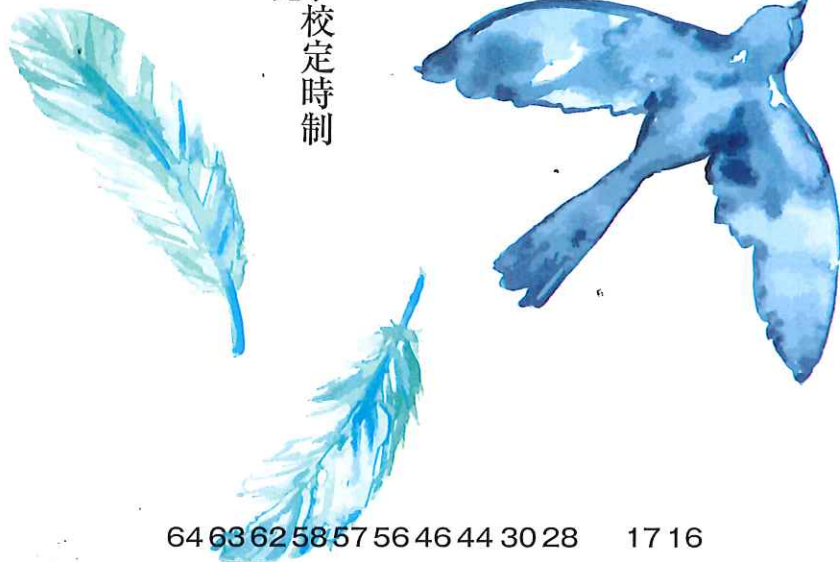
青森県八戸工業高等学校定時制の課程は昭和44年に設置された。
昭和39年に八戸地区が新産業都市に指定されたことを受け、昭和42年より
業界団体と地域の協力の下、当時八戸市議会議員在任中の中里信男元八戸市長が
中心となって八戸市並びに青森県に要望し実現したものである。

沿 革

- | | |
|--------------|--|
| 昭和44年 4月 1日 | 八戸工業高等学校内に機械工作科及び電気工作科を
修業年限4年として設置 |
| 昭和48年 4月 1日 | 同年入学学年より機械工作科から機械科に
電気工作科から電気科に科名変更 |
| 昭和53年 11月25日 | 定時制課程10周年記念式典を挙げる |
| 昭和60年 4月 1日 | 専修コース（機械科・電気科）の募集を開始 |
| 昭和63年 11月 5日 | 定時制課程20周年記念式典を挙げる |
| 平成 9年 4月 1日 | 定通併修制度による修業年限3年の教育課程を開始 |
| 平成10年 11月21日 | 定時制課程30周年記念式典を挙げる |
| 平成12年 4月 1日 | 単位制及び二期制に移行 |
| 平成18年 3月31日 | 専修コース（機械科・電気科）を廃止 |
| 平成18年 4月 1日 | 同年入学学年より機械科と電気科を統合して
工業技術科に科名変更 |
| 平成20年 11月21日 | 定時制課程40周年記念式典を挙げる |
| 平成30年 11月 2日 | 定時制課程50周年記念式典を挙げる
同日、記念碑を建立 |

目次

青森県立八戸工業高等学校定時制
50周年記念誌 学灯拓魂



64 63 62 58 57 56 46 44 30 28 17 16

巻頭言

2 定時制五十周年を迎えるにあたり

校長 瀬川 浩

発刊の言葉

4 ごあいさつ

創立50周年記念事業実行委員長 上柿 富久夫

お祝いの言葉

5 祝辞

八戸市長 小林 眞

6 ごあいさつ

E T A 前会長 河原木 督 悦

7 創立五十周年を記念して

青森県立八戸工業高等学校同窓会会長 畑 中 義 信

8 感謝

平成30年度定時制P T A 会長 中村 智加子

喜びの言葉

9 創立50周年に寄せて

生徒会長 山田 健 太

青森県立八戸工業高等学校定時制

50周年に寄せて

高松 彰 赤坂 裕一郎

一戸 利 則 高谷 悟

和田 論 伊藤 直哉

高橋 秀 一 石橋 幸 悟

諏訪 貞人 坂本 清孝

藤村 優 樹 川村 悠 輝

中川原 拓真 根本 あかね

福田 謙 二

50周年記念座談会1

上柿氏、定時制設立当時を語る

黎明期の思いを語る

50周年記念座談会2

姥名先生、21年間の思い出を語る

演劇部と省エネ部の思いを語る

演劇部のあゆみ 省エネ部のあゆみ

最近10年の歩み

歴代校長

歴代教頭

歴代職員名簿

歴代P T A 会長 歴代E T A 会長 歴代生徒会長

生徒数の推移

卒業生名簿 在校生名簿

編集後記

広告

定時制五十周年を 迎えるにあたり

青森県立八戸工業高等学校校定時制創立五十周年を迎えたこと心よりお祝い申し上げます。

本校定時制は、昭和四十四年、中卒就労者養成校として、機械工作科と電気工作科が設置され、働きながら学ぶ工業技術者育成に携わってきました。定時制教育は全日制と比較され、目立たない影の存在として捉えられがちです。しかし本校は、設置以来在籍が百名を超える時代もあり、定時制通信制総体全国大会での各部の活躍、生活体験発表会での活躍等、青森県で活躍する定時制高校として、その地位を確立してきました。



校長 川 浩
瀬

この五十年の中で定時制高等学校の役割は、勤労学生の教育機会確保から、多様化された生徒受け入れ、具体的には不登校生徒や中途退学者生徒の受け入れへと変遷しました。その都度柔軟に対応し役割を発揮し、多くの人材を世に送り出してきました。私が定時制教育に携わったのはこの時期でした。向学心が強いとか、将来に夢を持って自立を目指すとかの思いを全く感じられない生徒達でした。しかし、先輩教師からの言葉に衝撃を受けました。「何でここにいる」ではなく「だからここにいる」「過去は違っていても今いる生徒に対し、合わせて指導していくのが仕事だ」というものでした。

エピソードがあります。勤務した定時制高校では、全日制の文化祭の時期には、生徒が出校しません。定時制では、「ボウリング大会」「芸術鑑賞会」等校外授業が行われています。日頃全日制と同じ教室を使用するので定時制生徒は、同じ学校なのに参加できなかったからです。全日制に交渉し参加できる運びとなりました。何十年ぶりの画期的改革でした。

しかし、いざ文化祭で模擬店を出店することになったものの、生徒は、中学校時代行事に出席したことなく、行事では、お客様の存在だったため、何をすればよいかがわからなかったのです。教職員が中心になって生徒と一緒に準備、装飾や仕込み等すべて一緒に行いました。面白さが徐々に伝わり、達成感はかつて見たことのない顔の表情に現れました。「だからここにいる」生徒とともに柔軟に役割を發揮した

瞬間でした。生徒のその後の学校生活に対する真剣さは素晴らしいものでした。現在も同じ学校の生徒として全・定区別なく文化祭を行っているそうです。

さらに定時制高校は少子化、高齢化の影響で、生徒数の極端な減少、特別支援の必要な生徒の受け皿として役割を変えてきました。

県高校改革により、本校定時制は二〇二一年度より募集停止、二〇二四年三月末に閉課程となることが決まっております。創立五十周年を迎え、孔子の「五十知命」の心境です。

本校の使命を見極め、卒業生五四九名及び在校生には、これからも「学灯拓魂」への思いを胸に、歩んでもらいたいと思います。

ごあいさつ



創立五十周年記念事業実行委員長
(定時制初代生徒会長)
上 柿 富久夫

平成三十年度は、学校教育法制定（昭和二十三年）
によって定時制・通信制が設けられて七十周年の誠
義ある年でございます。加えて、青森県立八戸工業高
等学校創立七十五周年、並びに定時制課程創立五十周年
という節目の年でもあります。昭和四十四年四月の開
設以来半世紀。ここに記念誌を発行し記念事業が盛大
に挙行されますこと、関係各位とともにご同慶に堪え
ないところであります。

顧みますと、昭和三十九年の東京オリンピックに向け、
日本は高度経済成長長期に入り、同年八戸市は新産業都
市に指定されました。昭和四十年には臨海地区に中央
大手の工場進出計画が相次ぎ決定し、労働力の確保、
工業技術力の向上対策は最大の課題でした。

この当時、八戸商工会議所の協力・指導の下、事業所
内職業訓練所を開設するなど、技術教育に積極的に取
り組んだのが、八戸鉄工連合会長の中里信男氏（元八
戸市長）でした。氏は更なる時代の進展に対応し、産
業界のみならず地域社会の強力な要望にこたえるべく、「工

業高校定時制課程」設置を発議し、誘致運動の先駆者
となりました。しかし、遅々として進まず、昭和
四十二年、氏は市議会議員に立候補し、初当選を果
しました。その上で、業界団体及び地域の協力の下、八
戸市並びに青森県に対し、改めて強力を要望しまし
た。その甲斐あつて昭和四十四年、本定時制課程創
立がようやく実現されたのです。

光陰矢の如しと申しますが、あれから五十年、瞬く間
のことのように感じます。この間、八戸工業高校の果
した役割は、人づくり、地域づくり、そして国づくり
の面できわめて大きな貢献であったと評価されてお
ります。改めてここに、本校定時制教育にご努力、ご
尽力戴きました皆様方に、心より深く感謝申し上げ
ます。また、校長先生はじめ諸先生方のご高配、並
びに関係各位の八戸工業高等学校定時制に変わら
ざる御理解と御協力を御願ひ申し上げます。誠
にお願ひ申し上げます。誠にありがとうございます。

このたび、青森県立八戸工業高等学校校定時制が、創立五十周年を迎えられましたことは、誠に喜ばしく心からお祝い申し上げます。

同校定時制は、昭和四十四年に「機械工作科」「電気工作科」の二科が設置され開校し、以来半世紀にわたり、新産業都市として急速に工業集積が進む当市の産業界を支える創造性豊かな人材の育成に取り組んでこられました。

また、「自主・協調・勤労・創造」の校訓のもと、健全な心身の発達を基盤とする豊かな人間性の育成を目指し、日々の教育活動に取り組まれており、今日のすばらしい伝統と校風を築き上げてこられました。これもひとえに歴代の校長をはじめとした教職員の皆様の献身的な御指導、並びに快く生徒を学びの場に送り出してこられた事業者の皆様や保護者の皆様の深い御理解と御尽力の賜物であり、心より敬意を表する次第であります。近年、定時制課程が勤労青年のための教育機関としての役割だけでなく、多様な学びのニーズへの受け皿



八戸市長
小林 眞

としての役割が増している中、八戸工業高校校定時制課程では、生徒一人ひとりが自主的に学ぶ姿勢を培うことを目的として、「危険物取扱者」や「電気工事士」、「英語検定」などの多種多様な資格取得にチャレンジしながら、教職員のきめ細かな指導のもと、キャリアや個性を生かした進路を自ら決定し、県内外の企業への就職や、大学・専修学校への進学など自身の夢を着実に叶えておりますことは、大変意義深く喜ばしい限りであります。

どうか生徒の皆様におかれましては、この歴史のある八戸工業高等学校校定時制で学ぶことへの誇りを胸に、これからも日々の活動に一層励み、仲間と切磋琢磨しながら広い世界で活躍されることを願っております。

結びに、これまで学校を支えてくださった多くの皆様の御尽力に感謝申し上げますとともに、皆様の御健勝と御活躍を心からお祈り申し上げます、お祝いの言葉といたします。

ごあいさつ



E T A 前会長
河原木 督 悦

八戸工業高等学校定時制課程創立五十周年を迎えるにあたり、上柿富久夫創立五十周年記念事業実行委員長を中心に、半世紀の歩みを記念・祝す事業をされることに敬意を表すものであります。

私は三代目E T A（雇用主と教師の会）会長として本記念誌に寄稿させていただいておりますが、三代目E T A会長をお引き受けして、二代目E T A会長山田政信氏からの引継ぎの際、全日制の卒業生にも勝るとも劣らない卒業生を各方面に輩出していること、元八戸市長中里信男先生がE T A初代会長として、正に定時制課程を生み育てた方で、そこには大いなる理念と情熱が貫かれており、勤労青少年と工業力向上、地域業界の将来の展望等、並々ならぬ創世の魂を感じ、三代目会長をお引き受けしたのを覚えております。

しかし、時の流れとでも言いましょうか、少子化は言うに及ばず、教育を取り巻く環境の変化、子供達の

多様化、家庭内における教育観の多様化等、定時制高校の役割も変遷の一途をたどらざるを得ない時期の平成十一年に三代目E T A会長に就任することとなりました。創立から三十年を経た時期であり、勤労青少年の社会的状況に変化がみられた頃でもありました。

創立時のご苦勞をされた先生方とはまた違う次元のご苦勞されている姿を目の当たりにし、先生方に頭の下がる思いを抱いたものでした。ここに本年、八戸工業高等学校定時制課程の半世紀の歴史をつくってこられたすべての関係各位に心より称賛の意を表したいと思ひます。

結びに卒業生お一人お一人が八戸工業高等学校出身である事に誇りを持ち、幸せな日々を過ごされますよう、ご祈念申し上げます。

創立五十周年おめでとうございます。

創立五十周年を記念して



青森県立八戸工業高等学校
同窓会会長

畑 中 義 信

本校定時制創立五十周年を迎えるにあたり、同窓会を代表して衷心よりお祝いを申し上げます。

本校定時制課程は、昭和四十二年地元産業界より開校の要望を青森県及び八戸市に対し行い、工業技術力向上対策及び教育機会均等の元、後期中等教育を確立する重要性を掲げて、昭和四十四年四月に開校の運びとなりましたことを聞き及んでおります。

第一期生は同年四月七日機械工作科・電気工作科に計五十七名の入学が許可され、その後昭和五十一年度には機械科・電気科と名称を変え、昨今は少子化の影響等で生徒数の減少により平成二十一年三月には科を併合し工業技術科とされ今日に至っております。学習内容も濃く在籍の間に工業技術・情報技術・電機・電力等の基礎を覚え、その在籍中二年間に至っては、実習で腕を磨き、危険物取扱者・電気工事士・ガス並びにアーク溶接等の国家資格取得に臨んでいます。普段の会社勤務は各生徒自身が授業前に終了させ、授業は夕方の五時から夜九時過ぎまでの勉強に四年間取り組み、多事困難を克服し人間的・精神的にも著しく成長を見せ、社会の荒波に向かって出航することは誠に素晴らしく賞賛の至りであります。

開校以来半世紀を経て五九四名の卒業生を送り出ししておりますが、卒業生の中には会社を興し先陣を切っておられる方また会社の重要な地位におられる方々もお見受けいたします。今後益々のご活躍をご期待いたします。

近年の定時制課程は開校当時とは様相の変化があり、新たな学習形態が必要とされ、学習指導方法等にも改善と柔軟な対応が迫って来ている状況にあり、先生方の御指導とご苦労には大変頭の下がる思いであります。尚一層の学習指導にご尽力を賜りますようお願い申し上げます。

在校生の皆様においては、先輩方が築いてきた定時制五十年のあゆみである県立八戸工業高等学校定時制の伝統に鑑み、在籍中に取得できる国家資格についてはできる限りの挑戦をおこない、社会で必要とされる技術者に成長し活躍されることを期待いたします。

おわりに、八戸工業高等学校定時制創立五十周年を契機に「学灯拓魂」の精神を以って更なる充実発展に邁進することを祈願し、関係各位様の今後益々のご健勝とご活躍をご祈念申し上げます。お祝いの言葉といたします。

謝 感



平成30年度定時制
PTA会長
中村 智加子

私の息子は、八戸工業高校の全日制から定時制へ二年前に転籍しました。そのような息子を定時制の先生方が、学校全体で温かく迎えてくださったことをつい昨日のことのように思い出します。親の不安が息子に伝わってしまったのか、定時制に移った当時は、規則正しく学校へ

登校できず、安定しない心のまま学校に通っていました。不安定な息子に、担任の先生は細やかな気遣いで接してください、安心して学校に通えるように導いてくださいました。本当に感謝の気持ちで一杯です。不安定な登校状態は徐々に改善し、休まず登校できるようになり、気が付けば息子も卒業学年となりました。

今年、定時制の課程創立五十周年ということですが、半世紀という長い歴史の中では多くの生徒、保護者、そして先生方との出会いがあったことと思います。中学校卒業当初から、望んで定時制の課程に入学した方も大勢いらしたと思います。一方で、全日制の課程からやむを得ず転籍した方、様々な事情で他の高校から移ってきた方、高校を退学して社会人として働きながら、高

等学校卒業を目指して入学し直した方など、複雑な環境や事情で入学した方もいらしたとでしょう。そのような方々の思いとともに保護者の気持ちも先生方は受け止めてくれたのだと思います。

現在、大学進学を考えている息子に対し、教頭先生、担任の先生はじめ諸先生方が夏休みの間も勉強を見てくださいています。大勢の生徒を抱えている全日制にいたら、間違いなく、これほど細やかな指導が受けられる環境は得られなかったと思っています。本当に感謝しています。親としては、息子が頑張つて勉強し、本人の志望する大学へ合格することを願うばかりです。

その定時制が、三年後には募集停止、六年後には閉課程になってしまうと伺いました。とても残念でなりません。ただ、息子や保護者として私が定時制で経験した先生方との思い出は、一生消えることはありません。閉課程までの残された日々が、在校生の皆さんや今後入学される皆さんにとっても、かけがえのない時間となります。すようお祈りし、お祝いの言葉に代えさせていただきます。

創立 50 周年に寄せて

今年、八戸工業高等学校校定時制は創立五十周年を迎えました。創立から半世紀という喜ばしい年に、生徒会長でいられることをとても幸福に思います。

私が本校定時制一学年に編入生として入学したのは三年前の平成二十七年です。実のところ、定時制に入ることには抵抗がありました。入った最初の頃は、自分の勝手な思い込みや偏見で、定時制の生徒であることを心のどこかで拒んでいました。しかし、高校は卒業しなければならぬと思いついた学校です。何日も通ううちに編入学してよかつたなと思うことにたくさん出会いました。

まず、私自身に、一年次から今日までにいろいろな問題が起きました。辞めたいなと思うことも何度かありました。そのような時にも、教室で一緒に勉強しているだけで励みになる友人や、心配してくれる先生方がいました。私以外にも、本人だけでは解決できないでしょうもない問題を抱えた人がいますが、そういう生徒に対して、先生方がいろいろな解決策と一緒に考えてくれます。定時制の生徒で本当によかつたなと思います。

また、八戸工業高校では、全日制と定時制の生徒が一緒に活動する行事がいくつかあります。中でも、八工祭は全定関係なく皆で思う存分楽しめる最高の行事です。私たちは、本番に向けた準備を僅かな期間で整えます。こういうところが、小規模とさえ言えないほど少人数のため、

日頃から学年の枠を越えて、皆が全体のことを考えながら助け合って活動している定時制の強みだと言えます。

他にも学年の垣根を越え、定時制単独の行事として年一回行われる体育大会も毎年の楽しみになりました。夜の避難訓練も夜間定時制ならではの体験で、いざという時に本当に役に立つだろうと感じます。

定時制に編入学してからいろいろなことを思いました。昼間はアルバイトをして他の多くの高校生よりも一足早く社会を知り、一方で勉強もできる。先生方が生徒一人一人の悩みを理解して解決策を考えてくれる。文化祭を始め、様々な行事も体験できる。定時制の生徒であることを拒む理由はなくなりました。

創立以来、多くの先輩方が紡いで私たちに伝えてくれた定時制課程の歴史も、あと二年ほどで募集停止、その四年後には閉課程となり、幕を閉じます。大変残念ですが、ここで過ごしたたくさんの思い出はなくなることはありません。ですから、それまでの間に、定時制への入学を迷っている中学生がいたら、八戸工業高等学校校定時制を選んでほしいと思います。絶対に楽しい学校生活になるはずだからです。

私自身も、後少し残っている定時制での時間を有意義に過ごし、胸を張って卒業しようという気持ちで新たにしています。



生徒会長
山田 健太

50周年に寄せて

青森県立八戸工業高等学校定時制



定時制 創立五十周年を
記念して
十九代校長 高松 彰

創立五十周年誠におめでとうございます。これまでの定時制教育に携わった全ての教職員、献身的に生徒を見守り育んでいただいた保護者の皆様、後援会、同窓会、地域住民、行政を含め多くの本校関係者に元校長として心から感謝申し上げます。

八戸工業高校を退職してから七年の月日が過ぎようとしております。定時制の思い出は何かと思いを巡らす時、いつも思い出すのは出席率の高さでした。全日制の生徒よりも高い出席率は、それまで全定併設の高校を二校経験している私としては目を疑ったものでした。この高さの証は、生徒がしっかりとした目標を持ち、学習意欲に富、学友と共に学校生活を満喫している姿に表れていました。また、このことから定時制本来の姿はこうあるべきであると生徒から改めて知らされ、頭が下がる思いでした。

もう一つの思い出は、学校行事です。定時制は、日中に働いている生徒が多いため時間的制約があり、全員参加の行事は厳しいのですが各自事前に職場の許可を得ながら文化祭やボーリング大会、スケート教室などに全員参加していました。これも、なかなか出来ないことであり、感心したつどもありました。定時制で学校行事に全員参加とは他の高校にこの事実を知らしめたいと思つたのは一度や二度ではありませんでした。学校生活をナジヨイしている本校の生徒を自慢したかったのです。

思い出が尽きないのですが、今般、高校教育改革の一環として工業高校における定時制募集を平成三十三年度に終えるとしています。本校がこれまで長きに亘り定時制教育に貢献し、県内外に多くの人材を輩出してきた功績は大なるものがあり、少しでもそれらに関われたことを誇りに思っています。

最後になりますが、卒業生・在校生・教職員の皆様のご多幸とさらなるご活躍を祈念し終わりとします。



創立五十周年を祝して
二十代校長 赤坂 裕一郎

青森県立八戸工業高等学校定時制が創立五十周年を迎えられたことは、誠に喜ばしく、心からお祝いを申し上げます。

私は平成二十四年に着任して四年間の勤務でしたが、この期間、最も印象に残っていることは、定時制の生徒の勤勉さと生徒たちと真剣に向き合う教師集団の営みでした。

定時制は、夕方五時四十分からホームルームが始まり授業が行われますが、検定試験や資格試験が近づくと、多くの生徒たちが始業時間の前に教室に入り、補講や自習に取り組んでいました。このような勤勉さが、資格取得率の向上や良好な進路状況、公立大への合格を達成できた原動力であったと思います。「学灯拓魂」(元八戸市長の中里信男氏の揮毫・定時制玄関の壁に額があります。)を掲げる学び舎の生徒たちは、個人的にはそれぞれ事情を抱えているものの、お互いに助け合い、明るく真剣に毎日を通す中で技術と人間性を切磋琢磨し、成長を遂げていく姿を見せてくれました。多くの感動をくれた彼等の未来に、幸あれと願わずにはいられません。そして、生徒個々に熱意を持って献身的に指導にあたった教職員には心から感謝しております。

生徒数の減少が社会問題化している状況下で、県内の定時制教育の在り方も変貌しようとしています。しかしながら、八戸工業高等学校定時制には、全日制の課程と共に工業教育を通じて、八戸工業地域に人材を輩出し、地域産業を活性化できる人材育成に邁進されることを切に期待するものです。

結びに、これまで八戸工業高等学校定時制の発展のために尽力されました教職員各位、保護者と教師の会、生徒が勤務する事業主、同窓会の皆様から敬意と謝意を表わしますとともに、八戸工業高校定時制のさらなる飛躍を祈念し、お祝いの言葉といたします。



創立五十周年を祝して

二十一代校長 一戸 利 則

(八戸高等学校校長)

八戸工業高校定時制課程の創立五十周年を心からお祝い申し上げます。

昭和四十四年の設置以来、これまで五十年間に及んで工業技術者の育成等で大きな役割を果たしてきたことに改めて敬意を表するところであります。

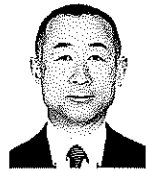
私が校長として勤務したのは、平成二十八年度の一年限りでしたが、工業高校全日制は、新採用と教頭の時に勤務経験があったものの、定時制は勤務経験がなかったことから一つ一つが新鮮な感動でした。

年度の最初にC棟二階の教室で全員と対面し、張り詰めた雰囲気の中で生徒一人一人の表情を見ながら挨拶や講話をしたことが今でもはつきりと思ひ浮かびます。その後何度か行った講話でも、工業が専門でない校長ではありましたが、生徒はよく耳を傾けてくれました。

また、校内を回るときには、定時制の玄関に掲げられている「学灯拓魂」の額をその都度目にし、その力強い四字から定時制の学びの精神を感じ取るとともに、灯火の下で工業技術を身につけようと勉学や学校行事などに勤しむ生徒の姿を重ね合わせてみたものでした。

私は、「鶴寄」で若いときに一步を踏み出すことを紹介したり、「灯」に礼節のことを書いたりしました。工業教育の中での5S(整理・整頓・清掃・清潔・躰)を実践することが、礼節につながることを伝えたかったからです。生徒数が少ないにもかかわらず、全員が力を合わせて取り組んだ八工祭の模擬店等の学校行事、生徒会活動、定通総体に向けた部活動、生活体験発表会などでは生徒が輝いて見え、特に、定通総体と生活体験発表会では直接会場に向き、つい応援に力が入ってしまったことを覚えています。これも定時制の教員団が生徒のことを中心に考え、生徒や保護者に寄り添った指導を日常行っていたからであると思っております。

本日、八戸工業高校定時制課程は、創立五十周年という大きな節目を迎えましたが、改めて定時制課程の輝かしい歴史と数々の思い出を、教職員や卒業生一人一人が引き継いで行つて欲しいと願っています。



創立五十周年を迎えて

二十一代校長 高 谷 悟

(青森北高等学校校長)

八戸工業高等学校定時制課程が創立五十周年という節目の年を迎えたことはたいへん喜ばしく、衷心からお祝い申し上げますとともに、昭和四十四年にはじまり、「学灯拓魂」の精神のもと、これまでの永きにわたり、「働きながら学ぶ有為な人材」を育ててこられたことに敬意を表する次第です。

私が校長として在職していた平成二十九年度は、生徒数は少なかつたものの、アルバイト等を終えた生徒が日々努力しておりました。電気工事士、危険物取扱者、ガス溶接等の資格取得のほか、進学のため、授業が始まる前のかなり早い時間から登校し、先生方の指導を受けて意欲的に勉強をしている姿に感心させられました。

また、その生徒たちを支える教職員も立派でした。日々の授業での指導はもちろんのこと、生徒一人ひとりに対して丁寧に指導しておりました。その成果は、就職・進学等で進路達成率100%となつてあらわれております。生徒の中には、仕事と勉強の両立による疲労や生活環境等により精神的に不安定になる者もいたため、学校での指導の他に家庭に向いて保護者の方と話し合い、生徒自身のことだけではなく家庭の問題まで相談を受け、アドバイスをする姿や、生徒のために会社等に頭を下げ、お願いしている先生方の姿を見る度に、教職員に対して校長として感謝の念でいっぱいでした。

さらに、生徒の中には第六十七回青森県高等学校定時制通信制総合体育大会において、陸上競技、柔道競技で、県代表としてそれぞれ一名が全国大会出場を果たしました。大会前にその生徒たちに声を掛けると、明るく「頑

張ります」という声を聞くことができ、頼もしく感じました思い出もあります。

このように、八戸工業高等学校定時制課程には少人数ではありますがありますが、情熱を持った教職員と将来への夢を持った意欲的な生徒との相互の信頼関係に裏打ちされた教育活動により、人を育て、社会に送り出してやるという「教育の原点」とも言えるすばらしさがあると感じております。今後とも、地域の皆様からの協力を得ながら、これまでの教育活動に自信を持ち、生徒一人ひとりのために丁寧な教育活動をさらに推進していただくことをご祈念申し上げます。創立五十周年に寄せる言葉とします。



本校の役割について思うこと

前教頭 和田 論

私は平成二十七年四月から、平成三十年三月まで、定時制教頭として勤務させていただきました。定時制の勤務は平成十年からの三年間に続き二回目でした。

最初の勤務で受け持ったクラスは、年齢が十五歳から六十歳以上の生徒までおり、私より年上の生徒は、私のクラスに生徒でありながら人生の先輩でありました。昔、事情により入れなかつた「高等学校」に今、勉強したくてここにいるという存在感が、私にもクラスの同級生にも良い影響を与えていました。二回目に着任したときは、すべての生徒が中学校からの入学生で、そこには初めて勤務した当時の事情とは全く違ったものがありました。

本校に入学してくる生徒たちは、経済的に恵まれない家庭を支えながらも、本校で資格を取り、自立しようという強い意志を持っている生徒ばかりでしたし、今日明日、食べるのに精一杯という中でもがきながら、この手で自立をつかもうとする生徒もいました。本校の先生方は、生徒が抱える困難の解消に取り組み、自立を目指す志に応え、心を育て、たくさん卒業生を送り出してきました。本校は、「夜間定時制にも関わらず工業を学び自立を目指す生徒」を、まさに支援している学校でした。大学の